

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」（平成28年度第1回研究会）

日時：平成28年4月16日（土曜日）午後1時30分より午後6時

場所：AA 研301室等

出席：梶、角谷、古閑、小森、安部、河内、塩田、若狭、牧野、古本、阿部、米田、神谷、高村、仲尾、澤田、品川

報告タイトルと報告者氏名・所属

1. 「研究会を始めるにあたっての趣旨説明」

梶 茂樹 AA 研共同研究員（京都産業大学）

2. 「Tembo 語, Haya 語, Ankole 語, Tooro 語, Nyoro 語など, 幾つかの Bantu 系諸語の声調の類型」

梶 茂樹 AA 研共同研究員（京都産業大学）

1. 「研究会を始めるにあたっての趣旨説明」

梶 茂樹 AA 研共同研究員（京都産業大学）

アフリカには声調・アクセント言語が多く話されている。しかし、その実態は十分理解されているとは言い難い。とりわけ日本では、声調声調(tone language)という漢語諸語やベトナム語、タイ語などの東アジアの大陸部の、いわゆる単音節語をイメージすることが多い。しかしながら、これらの言語は世界の声調言語の一部であり、これらをもって声調言語一般を語るわけにはいかない。とりわけアフリカ諸語に見られる多音節語の声調言語の理解が急務である。

東アジアの大陸部の言語とアフリカの声調言語とでは、幾つかの大きな違いがある。

まず第一に、東アジアでは単音節語の言語が多いのに対して、アフリカでは多音節語の言語が多い。第二に、東アジアでは高声調(high tone)や低声調(low tone)などの平板調のみならず、下降調(falling tone)や上昇調(rising tone)も声調の基本的単位(toneme)として存在するが、アフリカでは下降調や上昇調は生じて、それらは高声調や低声調の音声的変異か、あるいは高声調と低声調の組み合わせとして分析できるのが普通である。第三に、アフリカでは、アジアでは稀なダウンステップ(downstep)や浮き声調(floating tone)がしばしば生じる。第四に、アジア諸語では、声調はベトナム語やビルマ語に見られるように、しばしば母音の質（緊喉母音など）の問題と係わるが、一般にアフリカ諸語ではそういうことは見られない。第五に、アジア諸語では、声調の機能として単語を区別する語彙的機能が際立っているが、アフリカでは語彙的機能は一般に低い。しかしながら、アフリカの言語では、声調の文法的機能が低い。この声調の文法的機能は、アジア諸語にはほとんど見られない。第六に、アジア諸語では、声調発生(tonogenesis)に関して音節末の子音の脱落、そしてレジ

スターに関しては音節初頭における子音の有声・無声の区別の消失など、その音声的要因の多くがわかっているが、奇妙なことにアフリカ諸語の声調の発生に関してはほとんど何もわかっていない。

本研究プロジェクトは、以上掲げたこと、またそれ以外のことにも留意しつつ、とりわけアフリカ諸語の声調・アクセント言語としての類型をまず明らかにすることを目指す。そのため、各調査言語の声調・アクセントのパターンを音節（あるいはモーラ）ごとに全て書き出すことから始める。そして個々の言語における声調・アクセントの特徴、機能を明らかにし、ひいてはアフリカ諸語における声調の十全な理解を提供することを目的とする。

2. 「Tembo 語, Haya 語, Ankole 語, Tooro 語, Nyoro 語など, 幾つかの Bantu 系諸語の声調の類型」

梶 茂樹 AA 研共同研究員 (京都産業大学)

報告者が今まで調査した言語のうち Tembo 語 (コンゴ)、Haya 語 (タンザニア)、Ankole 語 (ウガンダ)、Tooro 語 (ウガンダ)、Nyoro 語 (ウガンダ) など、幾つかの Bantu 系諸語の声調の類型を示した。すなわち、テンボ語では、単語の声調のパターン数は、モーラ数 n に従って 2^n という風に等比級数的に増えていく。ただし 5 モーラ語以上となると単語自体が少なくなり、5 モーラ語では 13 パターン、6 モーラ語では 5 パターンしか実現されない。

タンザニアのハヤ語では、単語の声調のパターン数は東京方言と同じように $n+1$ という風に等差級数的に増えていく (n は語幹の音節数)。なお単独形では語末音節の H は次末音節に、そして次末音節の H は F として実現される。ただし 5 音節語幹語では 3 パターンしかない。

アンコーレ語はウガンダに話されるが、ハヤ語のすぐ北に話される。そしてその名詞の声調のパターンは多少簡略化されているが、基本的にはハヤ語と同じである。同じくウガンダのニョロ語では、パターン数は音節数に関係なく、単語音節末が H のものと次末音節が H のものの 2 パターンしかない。そして同じくウガンダのトーロ語では、次末音節に常に H が来るという 1 パターンとなる。